様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１３１６５

研究課題名（和文）子どもの表現力の獲得と形成に関わる親の学びのための造形プログラムの構築と実践

研究課題名（英文）Development and implementation of art program to educate parents about their children's expression and development.

研究代表者
吉川　暢子（Yoshikawa, Nobuko）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０４１２５５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は親を対象とした造形プログラムを開発することであった。その造形プログラムのしくみや検討することで、親の学びとなる場を構築し、親の造形意識の変容や苦手意識の減少を目的とするものである。最終年度は研究期間中に実施した親子の造形プログラムの実践から、その際に聴かれた子どもの姿や声をまとめた冊子を保育所や幼稚園、親に配布した。その冊子に記載された実践の写真等を見ながら親子で見ることにより、親子の対話が広がり、コミュニケーションが生まれた。そのコミュニケーションから親の子どもの表現理解につながり造形意識の変容や学びの獲得を得ることに繋がった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では親を対象とした造形プログラムを開発することで親の学びとなる場を構築して、親の造形意識の変容や苦手意識の減少を目的とした。そこでは、子どもに影響を与える家庭環境や親の表現意識を明らかにし、親を対象としたアンケート調査などを行った。その要因として家庭環境の変化や早期教育の低年齢化によって子どもの表現力の低下といった影響をあった。子どもに影響を与える親自身の表現力や意識が重要であるが、親自身もまた表現力や創造性が低下している現状がある。本研究によって親の意識が変容することで子どもの意識も変容し子どもの表現力や創造性を高めるための要因が明らかになると期待された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop an art program for parents.This program aims to create a place for parents to learn, to change their awareness of modeling, and to reduce their dislike of it.In the final year of the project, a booklet was distributed to day-care centers, kindergartens, and parents, summarizing the children's images and voices heard during the parent-child modeling program practices conducted during the research period. By looking at the photographs and other information on the practices described in the booklet with parents and children, dialogue between parents and children expanded and communication was generated.As a result of the research, it led to parents' understanding of their children's expressions, and resulted in the transformation of their awareness of modeling and the acquisition of learning.

研究分野：美術教育

キーワード：子ども　親子　造形意識変容　造形ワークショップ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

昨今の子どもは表現力の低下が指摘されている。表現力は自己肯定感の獲得に結びつく要素であり、如何に子どもの表現力を高めるかは幼児教育においても重要な課題である。

しかし、その方法は十分に解明され有効な方法が見出されていない。また、この問題に起因する要因として親の子どもへの関与の仕方や家庭環境要因があげられるが、親自身の表現力もまた低下している現状であり、親自身の表現力も育成することが同じく必要な課題である。

２．研究の目的

少子化や核家族化の影響によって、親にとって学ぶ場となる子育て支援拠点の役割は大きい。本研究は親の学びに関する造形プログラムを開発し、しくみや検討することで、親の学びとなる場を構築することが目的である。さらに本研究は親を対象とした造形プログラムの成果として、親の造形意識の変容や苦手意識の減少を目指すものである。

本研究の成果は子どもの表現力の獲得や形成、造形表現の質を向上することに影響するだけでなく、関連して魅力的な子育て支援の場づくりや保育者の学びにもつながるものである。

３．研究の方法

研究実施計画は、第一に親の造形意識や苦手意識について明らかにするために香川県内の子育て支援施設においてアンケート調査を実施し、実態把握やデータ収集を行った。

第二に、親の学びための造形プログラムを構築・実践（親講座も含む）するために、 親の学びに関与している機関に実態調査（視察やインタビュー調査）を行った。調査場所については、親子で共に学ぶ「場」を教育的環境として整備しているレッジョ・エミリア・アプローチにおいて「どのような実践が行われているのか」「場はどのようにつくられているのか」を調査した。

親の造形意識の変容や苦手意識をなくすため造形プログラムの実施のために、香川県内の子育て広場、高松市内の幼稚園、東京学芸大学附属のこども園にて、親子を対象としたワークショップを実施し、親の造形意識の変容を明らかにした。

４．研究成果

親を対象とした造形プログラムを実際の子ども園にて実践し、参加した親や保育者にアンケートを行った。親子での学びを獲得できる題材について、実践を通して検証することができた。レッジョ・エミリア・アプローチを実際に見学・調査し、そこで行われているプロジェクト活動などから検討し、実践における親子のかかわりや環境について考察を行った

また，コロナ禍において対面での親子の造形ワークショップ等の実施は多く実施できなかったが，SNS等を使用しオンライン等で造形活動の動画配信を行い，コロナ禍においても家庭などで実施できるワークショップ等を提案・開発し，実践した。

K県T市立M幼稚園において親子を対象とした造形プログラムを実践し、造形活動の展覧会を実施した。その展覧会では造形場面での子どもの記録（写真）やドキュメンテーション，子どもの声を紹介し，親だけでなく地域の方などに見ていただいた。その展覧会を見た感想や親の造形に関する意識等についてアンケート調査を行い，子どもの造形活動への親の理解等を明らかにした。

また、継続して幼稚園において親子を対象とした造形プログラムの試作（藍の生葉を用いた叩

き染め，ルミボード）を実践した。
なお、子どもの声を聴くことに着目し，より親の子ども理解につながるドキュメンテーションの作成を行い，親の造形意識の向上に寄与するように努めた。
また、親子を対象とした造形プログラムの試作(暗闇アート，白と黒の世界)として、特に暗闇アート，白と黒の世界では、場の空間の変容が子どもの創造性に変化をもたらすのかについて着目した。その結果、子どもの創造性を育む場をどのようにつくり出していくのかに関する知見を得ることができた。
最終年度である令和５年度は香川大学附属幼稚園において「子どもの世界展」を行なった。「子どもの世界展」では親子一緒に活動を楽しむことで、活動の中での子どもの気づきや言葉を聴いて感じてほしいと実施内容が企画された。実施内容は年長、年中、年少ともに本研究の中で行なってきた実践内容を参考に親の意識が変容できるような内容とし構成し、親子で造形活動を楽しむ体験型プログラムを実施した。参加した親に子どもたちがどんな思いで、どんな様子で、どんな表情で作品をつくっているのか感じ、知ってもらうために、研究代表者による親を対象とした「子どもの表現とは」についての講和を行い、「子どもの姿をみること」「なぜ親子で一緒に遊ぶ意味があるのかについて」の説明を行った。また子どもたちの作品を単に鑑賞するといった従来型の展示方法や作品展のあり方ではなく親が子どもの表現や作品を理解できるような作品展のあり方を再考し、子どもの表現への捉え方や親の意識の変容を明らかにした。アンケート結果からは「親の気づき」「親の考えの変化」「子どもの見方の変化」といった従来型の作品展では得られない子どもの表現理解につながる学びを得ることが出来た。
なお、本研究のまとめとして、子どもたちとの活動や親子のワークショップで行った写真を中心にした報告書を作成した。それを高松市内の保育者に配布し、それを見てもらいながら子どもの表現のあり方、親の意識、子どもの表現を育む実践内容などについて話し合った。

以上のことから、研究機関の間、さまざまな造形プログラムを実施し、親子での造形ワークショップ等を行ってきた。そこでは、一緒に「楽しむ」ことを通して、子どもの姿を見て、声を聴くことで子どもの表現に対する意識が徐々に変わっていく親の姿が見られた。結果として、すぐに目に見えるものではないが、子どもたちがこれから成長していくにあたり親の意識の変容は学びに大きく影響し、子どもは表現力の向上や表現力、自己肯定感の獲得につながっていくものであると示唆される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 吉川暢子	４．巻 53
２．論文標題 子どもの表現を育む場における芸術士Rの役割と課題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 美術教育学研究	６．最初と最後の頁 321-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉川暢子，手塚千尋，森本謙，笠原広一	４．巻 41
２．論文標題 幼児の土を使った遊びと探求Ⅰ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 香川大学教育実践総合研究	６．最初と最後の頁 57-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉川暢子	４．巻 305
２．論文標題 コロナ禍での芸術士Rによる家庭教育の実践	５．発行年 2021年
３．雑誌名 美術教育	６．最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片岡元子，松本博雄，吉川暢子，松井剛太，桑原育子	４．巻 42
２．論文標題 「保育について語ろうデー」への参加が保育者にもたらすもの	５．発行年 2021年
３．雑誌名 香川大学教育実践総合研究	６．最初と最後の頁 40-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 吉川暢子
2．発表標題 「高松市芸術士派遣事業」における芸術士実践からアートの力を考える－子ども自らが自分の「問い」を探求するために－
3．学会等名 令和3年度西日本芸術療法学会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 吉川暢子
2．発表標題 芸術士の実践の実践における光を使った遊びに関する一考察，ポスター発表
3．学会等名 第75回日本保育学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 片岡元子、松井剛太、松本博雄、吉川暢子
2．発表標題 自治体における探求型研修の実施とその評価Ⅱ，ポスター発表，共同
3．学会等名 第75回日本保育学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 松本博雄、片岡元子、吉川暢子、藤元恭子
2．発表標題 子どもの声を聴きとるⅡ－手紙の内容とやり取りの発展から－
3．学会等名 第75回日本保育学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 感性を育み「問い」を生み出す授業の構築に向けて―子どもの表現に対する意識や考えに対する認識の差についてー
３．学会等名 令和３年度全国保育士養成セミナー第６分科会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 芸術士の実践から見る子どもの表現と可能性についての一考察
３．学会等名 第74回日本保育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉川暢子，片岡元子，松本博雄，松井剛太，桑原育子
２．発表標題 「保育について語ろうデー」への参加は保育者の行動変容につながるのか
３．学会等名 第74回日本保育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉川暢子，松本博雄，谷口美奈，片岡元子，藤元恭子，松井剛太
２．発表標題 幼児の声を聴きとるー「書きたくなる」を支えるためにー
３．学会等名 第74回日本保育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉川暢子，岩永啓司，手塚千尋，根本淳子
２．発表標題 教員養成系大学間によるアートプロジェクト型カリキュラムの開発2 ―“感覚をひらく”ことをねらいとした芸術に基づく探求活動の学習環境デザインー
３．学会等名 第44回美術科教育学会東京大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉川暢子，手塚千尋，岩永啓司，根本淳子
２．発表標題 教員養成系大学間によるアートプロジェクト型カリキュラムの開発 ―“身近ではない自然素材”としての流木を用いた芸術に基づく探究の展開と考察ー
３．学会等名 第44回美術科教育学会東京大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 図画工作におけるオンライン授業の試み
３．学会等名 日本教育大学協会
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 芸術士Rの実践における子どもの「日常性」から生まれる表現
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松本博雄，谷口美奈，片岡元子，吉川暢子，松井剛太
２．発表標題 「遊びの質の高まり」を支えるアセスメントモデルの検討５
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 片岡元子，松本博雄，吉川暢子，松井剛太，桑原育子
２．発表標題 「保育を語ろうデー」における参加者と主催者の気付き
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 香川大学でのA/r/tographyの実践研究
３．学会等名 第９回ABR科研研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 美術科の指導法と実習関連授業およびABRの取り組み
３．学会等名 第10回ABR科研研究会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 子どもの表現を育む造形プログラムの開発
３．学会等名 保育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 手塚千尋，岩永啓司，吉川暢子
２．発表標題 プロジェクト型学習からArts -Based Research型実践へ―「土の色プロジェクト」の考察を中心に―
３．学会等名 大学美術教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 地域子育て支援拠点における親子遊びでの親の気づき
３．学会等名 第71回日本保育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉川暢子
２．発表標題 子どもの表現を育む場における芸術士の役割－高松市「芸術士派遣事業」の実践から－
３．学会等名 第57回大学美術教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Gota Matsui,Hiroo Matsumoto,Nobuko Yoshikawa,and Kazaki Yamaji
２．発表標題 upport for the Parent-Child Relationship while Child are Being Dropped Off at and Picked Up from Day Care centres
３．学会等名 19thPECERA2018（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 吉川暢子・笠原広一・池田吏志・手塚千尋・和久井智洋・森本謙・加山総子・池田晴介・和田賢征・丁佳楠・岩永啓司・小室明久・佐藤真帆・生井亮司・栗山由加・櫻井あすみ・フェルナンド　F フェルナンデス	４．発行年 2022年
２．出版社 学術研究出版	５．総ページ数 299
３．書名 子どもの表現とアートベース・リサーチの出会い（ABRから始まる探究（2）初等教育編）	

１．著者名 笠原広一（編），矢悦朗，真木千壽子，山本一成，小室明久，加山総子，平田智久，磯部錦司，森眞理，伊藤裕子，吉川暢子，要真理子，栗山誠，高橋敏之，東南さゆり．	４．発行年 2019年
２．出版社 東京学芸大学出版会	５．総ページ数 222
３．書名 アートがひらく保育と子ども理解：多様な子どもの姿と表現の共有を目指して	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関